

2014 年 8 月 24 日 「人生の実り」 森源八教区長

本日は、森源八東神奈川教区長の説教でした。以下に訓読のみ言を掲載致します。

＜訓読のみ言＞

「1962 年 10 月 28 日の真のお父様のみ言」

私たちが神様に侍ろうにも、私たちの父には世の中に畑一坪ありません。家一軒ありません。じゃり畑に倒れた穀物の話だとか、あるいばらの畑に落ちた種の比喻だとか、道端に倒れた比喻のようなものは、みな神様が経てきたのです。

道を造るためには、道端を守ることができる神様にならなければならず、じゃり畑を耕すためには、じゃり畑を守る神様にならなければならないのです。いばらの道において種を植えて育てようとするなら、いばらの畑を守る神様にならなければならないのです。そのような道端から、あるいはじゃり畑からいばらの畑を経なければ沃土を探し出すことができないのです。これがみな心情世界です。天の曲折を語ったものなのです。

道を探しさまよう神様を知らなければならず、じゃり畑の中を探してさまよう神様を知らなければならず、百倍の収穫と沃土を探してさまよう神様であるということを知らなければならず、いばらの畑の中から沃土を探してこられる神様を知らなければならないのです。そうして一番最後の日になって、一つの沃土を準備して三十倍、六十倍、あるいは千倍のこういう収穫の土地、そのような結実の土地に向けて神様は歩んでこられたのです。このような父を私たちが知り、その父に侍ることのできるようになるためのもの、侍ることのできる道理を教えてくれるためのものが宗教なのです。

(中略)

そのようになろうとするなら、台風が吹いてくるとき、幹ならば幹において台風が吹いてくるその幹の苦難をたどったのちに実を結ぶことのできる木になるのです。あるいは、ある日浸水という恨めしい事情にぶつかるようになるときに、一つの結実として現れた種も、やはり浸水の苦難を体験した枝にならなければならないのです。その苦難を避けては、その木において結実を見ることができません。復帰摂理の歴史路程にあっても同じです。

神様を根とし復帰摂理の幹を中心として、枝の前において一つの結実を収めるべき場面において結実できるそれ自体は、すべての要素を吸収して、怨 讐になる要素を即座に除去し、他人が引き寄せない本質的な要素を 100 パーセント吸収できる力量を内在している存在でなければなりません。そうしてこそ、完全な六千年の心情の結実体として現れることができるのです。これは天理の原則です。